

「……お医者様でも草津の湯でも、恋の病はなおりやせぬです」

アリサの、よく通る柔らかな声が静かな教室に響く。

「はい、正解。バニングスさん、良く知ってたわね」

担任の言葉にかすかに安堵の表情を浮かべながら、アリサは小さく息をついて腰を下ろした。

フェイトが、意外そうな顔でアリサを眺める。

アリサでも、たまには答えに自身がないときもあるんだな、とフェイトはまるで感心したように小さくうなずいた。「いまバニングスさんが答えてくれたように、お医者さんか草津の温泉か、というくらい、温泉には色々な効能があるとされています。みんなのいるこの海鳴にも、温泉がありますよね。日本には、他にもあちこちに数え切れないほどの温泉があつて……」

自身の斜め前方、窓際の席で退屈そうにあくびを嘯み殺しているアリサの姿にフェイトは苦笑する。

授業中のアリサは、フェイトが見ている限りではいつでもどことなく手持ち無沙汰、といった様子だった。

一応板書はしているものの、説明の言葉などはほとんど耳に入っていないように思える。

それでいて質問には常に完璧に答えるのだから、凄いとしか言いようがないな、とフェイトは溜息をついた。

「……学校、か」

誰にも聞こえないよう、微かな声でフェイトがつぶやく。闇の書の事件を経てこの海鳴で暮らすようになってから二ヶ月。ようやくこちらでの生活にも慣れ、友人も増えた。一年前には想像も出来なかったいまの自分の環境に、軽い目眩すら覚える。

それもこれも全て、なのはのおかげだ。

数ヶ月前、絶望の淵にいた自分を救ってくれた少女。その後ろ姿に視線を移す。

なのはは、黙々と教師の言葉をノートに書き留めていた。彼女がいなければ、いまどうなっていただろう。

少なくともここにいることはない。地球にすらないだろう。次元犯罪者として管理局に囚われの身か、あるいは……あの人と共に、アルハザードに辿り着いていたのだろうか。

いや、とフェイトは首を振る。

たとえ道が開けたところで、あの人が――母が、自分の同行を許すとは思えなかった。

おそらくは捨てられ、アルフと二人行くあてもなく、どこかの次元世界でひっそりと生きていく。

それでもいい、と思っていた。いや、いつそ死んでしまっても構わないとすら思っていた。あの人に捨てられた自分に、もはや存在する意味などない。

だが、優しい少女の声と温かな手が、自分に生きる意味

を与えてくれた。

「……なのは」

小声で、その名前を口にする。

そのときだった。

なのはが、わずかにフェイトのほうに振り向いた。

フェイトが、驚いてなのはを見る。

聞こえているはずがなかった。現に、フェイトの前後両

隣のクラスメイトたちはなんの反応もしていない。

なのに、なのははまるでフェイトに呼ばれたかのように、

身体を小さくひねってフェイトに視線を向けたのだ。

そうしてその空色の瞳がフェイトの朱の瞳と重なり合う

と、なのはは照れくさそうに小さく微笑んだ。

「あ……」

思わず声をかけようとして、なのはがまたすぐに授業を

聞く体勢に戻ってしまったのを見て慌てて口をつむぐ。

時間にしてわずか一秒にも満たない、そんな一瞬の交錯

だったにもかかわらず、フェイトは自身の鼓動が明らかに

早くなっていることに気付いていた。

なのはと出会うまでは一度も経験したことのない感覚

覚に、フェイトの呼吸が荒くなる。

この感覚について、フェイトは頭の中の知識としては

知っていた。

おそらくは、そういうことなんだろう、と思う。

だが、それは自分がけて持ってはならない想いなのだ
と、フェイトは自らにそう言い聞かせてきた。

時の庭園、その最深部で、次元の裂け目に消えていった
母の顔が浮かぶ。

なのはは、私を救ってくれた。

私は、母さんを救えなかった。

私に出来ることなんてなにもない。

それは、なのはに對しても同じだ。

私が、なのはに出来ることなんて、なにも――

「はい、それじゃあ今回はここまでね」

そう言っただけで教科書を閉じるのとほぼ同時に、校内

に授業時間の終わりを告げるチャイムの音が響いた。

ふう、とフェイトが椅子の背もたれに身体を預ける。

そのまま呆然と天井を見上げる。

「ねえ、フェイトちゃん」

と、不意にその視界を覆うようにして、なのはがフェイ

トをのぞき込むように顔を出した。

「わ、な、なのは？」

フェイトが驚いて身を起す。

「フェイトちゃん、なんだかぼうつとしてたみたいだけど、
大丈夫？」

心配そうにやや上目遣いでフェイトを見るなのはに、

「大丈夫、なんでもないよ」

とフェイトはわざと少し大きさに首を振って答えた。

「そう？　なら良かった」

なのはの表情が明るくなる。

その笑顔を目に焼き付けながら、フェイトはもう一度心の中で思った。

私には。

この子に、なのはに対して出来ることなんて、なにもないんだ、と。

「そう言えば、なのは」

休み時間。教室内の喧噪を縫うようにしてなのはとフェイトの元にやってきたアリサが、なにか思い出したように声をかける。

「なあに？　アリサちゃん」

「あんだ、もうすぐ誕生日よね」

アリサの言葉に、フェイトがなのはに視線を向ける。

「うん、そうだよ。アリサちゃん、覚えててくれたんだ」

嬉しそうに微笑むなのはを見て、アリサが当たり前前でしょ、とうなずく。

「フェイトだって覚えてるでしょ、なのはの誕生日」

「え、あ、うん……一応」

「え？　あれ？　わたし、フェイトちゃんに誕生日のこと言っただけ？」

「うん。以前、ビデオレターで」

「言ってたわよ。あたしも一緒にいたじゃない」

「そうだった……あはは」

ばつが悪そうに苦笑いしながら、なのははフェイトの手を取った。

「でも、フェイトちゃんも覚えてくれたんだ……ありがとうね」

そう言うてはにかむなのはに、フェイトは頬がかすかに上気するのを感じて息をのむ。

「あーはいはい、わかったからいちゃいちゃしないの」

あきれ顔で肩を落とすアリサの横で、

「なのはちゃんは、フェイトちゃんが大好きだもんね」

いつの間に来たのか、さすがが目を細めて二人を眺める。

「え、あ、あの、あ……うん」

顔を赤くするなのはの頭を、

「はいはい。そこまでよ」

とアリサが軽く小突いた。

「で、なのは。あんだなにか欲しいもの、ある？」

「え？　アリサちゃん、もしかしてプレゼントくれるの？」

「なのはもあたしのときにくれたでしょ。お礼よお礼」

「ええ、お礼なんて別にいいのに」

「いいから、早く言いなさい」

「うーん、欲しいもの、かあ……」

なのはが、考え込むように腕を組む。

「えーとね、えーと」

首をひねったり、顔を持ち上げたり、腕をせわしく組み直したりしながら、しばらくなにか独り言のようにぶつぶつとつぶやいていたのはだったが、

「……ごめん、なにも思いつかないや」

と、アリサと見て困ったような顔でそう答えた。

「はあ？ なんにもないの？」

「うん。色々と考えてはみたんだけど」

責めるようなアリサの声に少し身を引きながら、なのはが申し訳なさそうにうなずく。

「やれやれ、それはまた無欲な話ね」

なのはの表情から、その言葉が自分たちに遠慮して言っているわけではないことを悟って、アリサがあきれたように首を振った。

「なのはちゃん、本当じゃないの？ お洋服とか、小物とか」
「さすがが念を押すように尋ねるが、

「服はお母さんが買ってきてくれるし、アクセサリーみたいなのは、あんまりよくわからなくて」

と、なのはは照れくさそうに笑うだけだった。

「ま、いまのなのはにはフエイトがいるしね、それだけで充分か」

「え？ わ、私？」

急に話を振られ、フエイトが困ったようになのはを見る。
「もう、アリサちゃんてば変なこと言わないで」

なのはがフエイトをかばうように割って入るが、

「違うの？」

「違う……けど」

「なら良いでしょ」

「うう、アリサちゃんの意地悪」

アリサに一蹴され、なのはは涙目になりながら黙り込んでしまった。

「さて、でもまあ、なのはの言いたいことはわかったわ」

前髪をかきあげながら、アリサがなのはとフエイトの顔を交互に眺める。

「あんたたち、今度の週末、予定あけておきなさい」

突然のアリサの言葉に、二人はなんと答えていいかわからず呆然とアリサを見た。

「すずか、はやてにも言っておいて。日曜日、空けておくようにって」

「うん、わかったよアリサちゃん」

うなずいて、自分の席でクラスメイトと話しているはやての元に走っていくすずか。

「ちょ、ちよつと待ってアリサ」

ようやく我に返って、フエイトがアリサを引き留めるように手を伸ばす。

「なによ。なにか用事でもあるの?」

「ううん、ない……けど」

フェイトがなのはに視線を向けると、なのはも同意するように首を振った。

「ならいいでしょ。ちゃんと空けておきなさいよ」

「いや、あの、空けておくってなにを」

するのか、と言いかけるフェイトを遮るようにして、アリサがフェイトに人差し指を突きつける。

「あんたねえ、この話の流れならわかるでしょ」

「え、えっと、そんなこと言われても」

おそらく、いまの会話で全てを理解出来るのは当のアリサ本人かすずかだけじゃないだろうか、とフェイトは思う。

「プレゼントよ、プレゼント」

フェイトの横で、きよんとした顔で二人のやりとりを眺めていたなのはを見て、アリサが告げる。

「週末。なのはのプレゼント、買いに行くわよ」

週末

じゃあ早速だすわ
フエイトはやつは
「じい」ってやつはめいめい

心配しなぐも大丈夫
ちゃんこ
なのはに愛の心
誰とていふ人々

えへへ…
じゃあぢいじいぢいぢいぢい

なんや、私もいるのに
そんな寂しそうな顔なれたら
たまらんあ

あいや
別にそんな訳じゃ…

はははこ
ごめいぢいぢいぢいぢい